

乳房炎を原因菌別にとらえ効果的な対処法を選択しましょう

BVD・白血病などの伝染病に加えて、風邪・下痢・乳房炎を含む全ての感染症は、3つの要因が揃って初めて成立します（図1）。

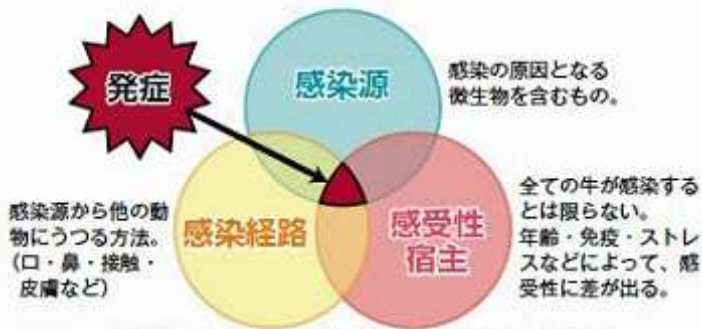


図1：感染症の3要因（「動物の感染症」近代出版）

前号では、乳房炎に対する新たな感受性宿主対策として、ワクチンについて取り上げました。今回は、発症してしまった乳房炎の感染源（原因微生物）に焦点を当て、それぞれの特徴について改めて整理してみました（表1・図2）。

乳房炎の対処法は、原因菌を特定し、その特徴を踏まえた治療や菌種によっては経過観察を選択することです。このことで抗生剤の使用量や廃棄乳を減らすことにもつながりますので、獣医師とよく相談して治療計画や対処法を検討していきましょう。

また、乳房炎発症要因は、病原体だけではありません。環境・搾乳衛生・エサ・牛の免疫状態など、他の要因も同時に見直しながら、総合的に乳房炎の対策を進めていきましょう。

		治療のターゲット ^{①)}							
		乳汁	乳腺深部	全身	△	×			
搾乳時に、 ミルカーや手 を介した感染 (伝染性)	原因菌	CB (コリネバクテリウム)	SAG (無乳性レンサ球菌)	SA (黄色ブドウ球菌)		マイコプラズマ			
	特徴	ポストディフフィンングで予防できる。	治療に反応するが、一斉に治療する必要がある。	抗生剤が効きにくく、再発や慢性化しやすい。		一般の細菌検査で菌が検出されず、重度な化膿性乳房炎。			
牛がいる 環境 から感染 (環境性)	原因菌	CNS (高産ブドウ球菌)	OS (菌性レンサ球菌)	AP (ストレプトコッカス)	CO (大腸菌群・大腸菌・カンパシウムなど)	桿菌菌 (PA)	Yeast (酵母菌)	プロトセカ (藻類)	
	特徴	日和見的に感染し、多くは一時的。	乳房炎の原因菌で最も多く、季節変動はない。中には難治性となるものもある。	悪臭を伴う乳汁。分房全体が膿瘍化してしまうと治らない。	夏から秋に多発。急性かつ重症になる場合がある。	治りにくい。	発熱の時に食欲が低下しない。乳房炎軟膏で悪化させる恐れがある。	発症すると治療は出来ない。	

表1：臨床型乳房炎の原因となる菌と主な特徴
(十勝乳肉改良協議会発行「MASTITIS CONTROL II」を6頁に、十勝NOSA海外研修プログラム講師資料Mastitis Therapyより転写し作成)

注) 『治療のターゲット』とは

“牛のどこを標的に治療するか”ということ

- 乳 汁 … 乳房炎軟膏
- 乳腺深部 … 乳房炎軟膏だけでは治りにくい
- 全 身 … 発熱など、全身症状に対する治療を優先する (CO以外でも、菌血症になっている場合は同様に治療が必要)

△…抗生剤を使用しても治りにくい

×…抗生剤治療の対象ではない



図2：乳房炎のおもな感染源